



発達面に課題を抱える子どもを対象としたレジリエンスキャンプ

著者	坂東 和晃, 石田 陽彦, 川崎 圭三
雑誌名	関西大学心理臨床センター紀要
巻	7
ページ	79-84
発行年	2016-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/9971

発達面に課題を抱える子どもを対象としたレジリエンスキャンプ

葛城市教育委員会 坂東 和晃
関西大学臨床心理専門職大学院 石田 陽彦・川崎 圭三

要約

A市では、発達面に課題を抱える小学生や中学生を対象に、レジリエンスを高めることを目的としたキャンプが毎年実施されている。本稿では第10回目となる2015年度に開催されたキャンプの様子について報告し、子どもたちのレジリエンスを高める要因について考察した。ストーリーキャンプを導入し、時間が明確に構造化された結果、逆説的に子どもの逸脱行動を問題行動ではなく主体的な意思を持った行動として、周囲のスタッフが理解することができ、結果として子どもの安心感を高める場の醸成が促進されたと考えられた。

キーワード：レジリエンス、達成感

はじめに

A市では、市教育相談室主催のもと、学び方に特徴・個性のある子どもたちがそれぞれにあった学び方で自信を持ち、小集団グループ活動の中で、友達とのかかわり方・生活の楽しさなどを身に着け、レジリエンスを高めるキャンプが実施されている。同時に、大自然の中でゆったりと過ごすことで、保護者のリフレッシュをはかることも目的としている。

レジリエンスの定義は未だ定まらない(齋藤・岡安, 2009)が、大枠で見ると“逆境にさらされたり、ストレスフルな出来事によって精神的な傷つきを受けても、そのことから立ち直り、適応していくことができる個人の特性のこと”(平野, 2012)とする見解がある。さらに、レジリエンスには先天性のものと後天性のものがあると指摘(平野, 2012)されている。本稿で対象とするレジリエンスは後天的なものであると考えられる。また、顯谷ら(2015)はレジリエンスキャンプにおけるレジリエンスを“困難な状況にあったとしても柔軟にそれに対応し、

何とかうまくやっていく力”と定義している。本稿ではその定義を踏まえた上で、レジリエンスを“困難な状況にあっても柔軟にそれに対応し、何とかうまくやっていくための後天的な個人の特性”とする。

本キャンプは子どもたちに自然体験させることが目的ではない。自然の中という非日常的な場所で子どもたちが達成感を味わい、小集団の中で他者とのかかわりを体験することをサポートし、子どもたちのレジリエンスを高めることを目的とし、キャンプという手法をとっている。レジリエンスが高まるのは有意義な形で環境に参加し、貢献する機会がある場合である(Fraser, 2009)ことから、日常とは異なるキャンプという環境で、“濃い人間関係”(石田, 2014)を味わいながら、その中で子どもたちが達成感を感じることで、レジリエンスは高まると期待された。

本稿では、2015年度にA市で実施された第10回目のレジリエンスキャンプ活動を報告し、キャンプで実施された子どものレジリエンスを高めるための工夫について紹介すると同時に、

表1 本キャンプにおける役割

CN	キャンプ全体をコーディネートする役割。A市、参加家族、スタッフ、キャンプ施設など、あらゆる団体を有機的につなぐ。
AV	キャンプ活動に関するアドバイザー。自然の中での過ごし方や楽しみ方を指導する。
SV	心理に関するスーパーバイザー。発達障害の特性を理解し、子どもとの関わり方を指導する。
AD	キャンプのプログラム進行役。子どもたちの前に立ち、キャンプ活動全体を引っ張っていく。子どもたちやスタッフたちの様子を見ながら、プログラムの進行を調整する。
MD	キャンプ活動全体を見ながら、突発事項に対応する裏方。ADと共にプログラム進行について判断する。CLや物品の補助に入ることもある。
遊撃	班活動から外れた子どもの対応など、主にCLの補助を行う。必要に応じて班活動の中に入ることもある。
CL	班活動のリーダー。スタッフの中で最も子どもたちと深くかかわりを持つ。子どもたちにとって班が安全な場として機能するように、子どもたちと関係性を築いていく。
物品	キャンプの進行に応じて必要となる物品を準備し、必要な場所に必要なタイミングで届ける役割。
キャラクター	ストーリーを進行する役割。キャンプ活動のシンボル。

その効果について考察する。

A市と関西大学は地域連携協定を結んでおり、本キャンプはA市特別支援教育サポート事業として、A市教育相談室と関西大学社会的信頼システム創成センターによって企画・運営された。

概要

対象：A市内在住で、以下の要綱に当てはまる児童・生徒およびそのきょうだい

- ・成長・発達について市の巡回相談を受けたことがある児童等
- ・友達との関係づくりや集団活動について課題を持っている
- ・着替え、トイレ、入浴、食事などが自分でできる
- ・キャンプ活動中、保護者と離れていてもグループ活動に参加することができる
- ・上記の対象の児童で保護者の付き添いが可能であること

参加者：対象の要綱に当てはまる児童・生徒15名(男子9名・女子6名)。

日程：2015年9月5日(土)～6日(日)の1泊2日

スタッフ：A市教育委員会職員、臨床心理士、

臨床心理学や発達心理学を学ぶ大学院生など計17名が参加した。本キャンプではコーディネータ(CN)、アドバイザー(AV)、スーパーバイザー(SV)、アシスタントディレクター(AD)、マネジメントディレクター(MD)、キャンプリーダー(CL)、遊撃、物品、キャラクター(画家)の8つの役割があり、スタッフはいずれかの役割を担当した。それぞれの役割の内容を表1に示す。

場所：国立曽爾青少年自然の家

プログラム内容：

アクティビティは沢登り、作品制作、野外炊飯の3つであり、各アクティビティはストーリーの進行に合わせて展開された。各アクティビティには個々にねらいが設定されていた。1泊2日のプログラムを表2に示す。なお、保護者は子どもたちとは異なるプログラムが提供された。保護者と子どもたちは基本的には開会式後には別行動となり、就寝も別々の部屋であった。閉会式の後に、子どもたちは保護者の下へと帰った。

表2 キャンププログラム

1日目	2日目
11:00 集合、開会式	6:00 起床
12:20 昼食	7:00 朝の集い
13:00 沢登り	7:30 朝食
16:30 入浴	8:30 荷物整理・清掃
17:20 夕食	10:00 野外炊飯
19:00 作品制作	12:30 昼食
21:15 就寝準備	13:30 閉会式
21:30 就寝	14:30 解散

ストーリー：

1泊2日のキャンプ中は最初から最後まで運営側が設定したストーリーが展開される「ストーリーキャンプ」という手法をとる。ストーリーを展開させることで、アクティビティへの参加動機を高め、子どもたちが集団活動に主体的にかかわることができると思われる。

本キャンプでは、「山に住む画家から個展の招待状が届き、山へ出かけるが、そこにはスランプに陥った画家の姿があった。みんなで画家を助けて、個展を成功へと導こう」というストーリーを採用した。

活動の内容と様子

開会式：

開会式では、子どもとスタッフの間の緊張をほぐすために新聞びりびりというゲームを使っ



図1 キャラクター登場

てアイスブレイクを実施した。そのアイスブレイクの最中に、キャラクターを登場させ、キャンプのストーリーへ子どもたちを導入した。

食事（夕食・朝食）：

野外炊飯以外の食事は食堂でのバイキングであった。いつもは小食だという子が、何度もお代わりに行く姿が見られた。また、好きなものだけをとってきて、そればかり食べている子も何人かいた。食べるスピードもまちまちであった。

スタッフは子どもたちが食べたいものを自分のペースで食べられるように、子どもたち一人ひとりのペースを尊重した。最初は自分ひとりで食べていた子どもたちが、スタッフが食べ終わるまで待っていたり、ほかの子どもが食べているものと同じものをお代わりしに行く場面もあった。食べる体験を共有することで、食事という媒介物を間に置いた三項関係を構築する場として食事場面が機能していたと考えられる。

沢登り：

キャラクターから川の上流にある幻のインクをとってきて欲しいとお願いされ、沢登りをすることになる。安全確保のために、ウエットスーツ・ライフジャケット・ヘルメット・沢靴・軍手を装備し、川に入った。川の水の冷たさに驚きながら、歩きにくい岩場を流れに足を取られつつも、子どもたちは各々のペースで進んでいった。途中のはしごを登るような場面では、子どもたちはスタッフの手を借りながら障害物



図2 沢登りの様子

を乗り越えていった。

目を輝かせながら先を急ぎたい子や、おっかなびっくり進んでいく子、寒さに身を固くしながらゆっくりと進む子など、その様子は様々であった。また、幻のインクに期待を膨らませる子や、目的よりも川の様子が気になる子など、沢登りでの体験は個々によって異なるようであった。

スタッフは、各々の子どもたちの体験を尊重し、体験の中で感じることを共有しようと努めながら、必要な場面では手を貸しながら、子どもたちのペースに合わせて一緒に進んでいった。

作品制作：

キャラクターから、作品作りを手伝ってほしいと依頼され、班ごとに一枚の布に自由に彩色し、作品を作り上げた。沢登りで手に入れた幻のインクを使う子も多く見られた。自分のインクが手違いで誰かに使われてしまい、それを指摘できずに集団から離れてしまう子がいた。遊撃役のスタッフがその子に対応し、自分のものだという確証がなく、怒るに怒れない気持ちであることを共有し、一緒にその子なりの納得の仕方が見つかるまで付き合った。その子は「間違えることもある」と自分の気持ちの落としどころを見つけて集団に戻り、制作をすることができた。

野外炊飯：

忙しいキャラクターに代わって、お客さんに振る舞う「おもてなしカレー」をつくろうと誘われて、子どもたちは班ごとにカレーを作った。薪を割って火を熾したり、食材を切ったりと目的をもって作業する子どももいれば、やりたいことが見つからずに集団の中を漂う子どももいた。火を見るのが楽しくて、ずっと火の前を動かない子どももいた。スタッフは、火や刃物などを使う際の安全に気を配りながら、野外炊飯場での子どものやってみようを探すサポートを行った。

閉会式：

最後に子どもたちはキャンプリーダー役のスタッフからコメントが書かれた感謝状を渡され、集合写真を撮って解散となった。子どもたちは帰りの車の窓からスタッフに手を振ってくれたり、名残り惜しそうにする様子が見られた。

考察

子どもが抱いた意図や欲求が最大限に尊重される場で、行動することこそ主体的な行動であり、子どもが主体的に行動する中で得られた成功体験こそが、達成感へとつながると考えられる。達成感の積み重ねによって、肯定的な自己像が心の中に形成され、それがレジリエンスの源になると思われる。レジリエンスの効果は、実際に困難な状況下に子どもたちがおかれた際に明らかになるものであるため、本キャンプでの効果を正確に測定することは困難であろう。実験・調査の手法でもって効果を測定することは難しい。今後の課題としては、参加者と継続的にかかわりを保ち、レジリエンスが実際に発揮されることがあるかを縦断的に調査することが必要であろう。

本キャンプでは、ストーリーが展開されることで、キャンプ参加者の間に共通の話題が多く提供され、参加者・スタッフも含めた全員の間に共通の話題が生まれやすくなると当初は期待された。しかし、発達障害と診断される子どもたちには興味・関心の偏りという特徴があるため、一人ひとりの興味のあることが異なり、同じ話題になかなか発展しにくい面も見られた。キャラクターの設定が画家ということから、インパクトが強くなかったとも考えられる。そのような際には、子どもたちをつなぐ拠点としてキャンプリーダー役のスタッフが機能することで、子どもたち一人ひとりの興味・関心を尊重しながらも、参加者同士をつなぐことができていた。スタッフがつながりを保つことを意識することで、キャンプ中は人と人のかかわりが途

切れることなく、人間関係が深まっていく下地となっていた。

キャンプでは、プログラムによって時間が構造化されており、次になにをするのかを、カードなどを使って子どもたちにその都度視覚的に提示している。その中で、子どもたちがプログラムの進行とは異なる動きをした時には、指示がわかっていないのではなく、その行動にはその子の意図や欲求が込められているととらえることができるため、スタッフはプログラムの進行のための指示を与えるのではなく、その子の意図や欲求をくみ取ろうと努力し、その欲求を最大限に尊重することができる。下川（2012）によると、子どもの支援において、子どもが自らの行動を言葉にしていく過程を支えるものは、丁寧に子どもに寄り添い、関係を結ぶことである。本キャンプでのスタッフのかかわり方は、子どもたちに寄り添い、“濃い人間関係”（石田，2014）を結ぶための一つの努力の形であるといえよう。さらに下川（2012）は、子どもが自分の声を聞いてくれる人があることを感じることで、行動化が減少し、子どもの周囲に“安心感を育てるつながり”が形成されていくと述べる。キャンプでは子どもの声を聞こうと最大限の努力を行い、安心感を育てるためのつながりを形成している。子どもの逸脱行動に対して、問題行動というラベルを貼ってしまうことで、集団の中に問題のある子どもが形成されてしまう。子どもの行動だけに目を奪われるのではなく、その背景にある意図や欲求を理解しようとする姿勢を保ったかかわりを継続していくスタッフによって、問題のある子どもはキャンプの中に一人も形成されることはなかった。本キャンプが子どもにとって安心する場として開催され続

けることを期待する。

謝辞

本キャンプ実施に際しまして、ご尽力賜りましたA市教育相談室佐々木室長をはじめ、保護者プログラムをご担当くださった下山先生、そしてスタッフの皆さまに深く感謝いたします。

文献

- 顯谷美也子・湯浅龍・石田陽彦・川崎圭三（2015）発達障害を持つ子どもを対象としたレジリエンスキャンプの実際，関西大学心理臨床センター紀要，6，41-45.
- 平野真理（2012）生得性・後天性の観点からみたレジリエンスの展望，東京大学大学院教育学研究科紀要，52，411-417.
- 石田陽彦（2014）発達障害の子どもたちに、市の教育委員会とKU—RENKAが連携し、自然キャンプを実施する意味について，社会的信頼学，2，73-77.
- Mark W. Fraser, ed. (2004) *Risk and Resilience in Childhood: An Ecological Perspective 2nd ed.*, National Association of Social Workers. 門永朋子・岩間伸之・山縣文治（訳）（2009）子どものリスクとレジリエンス—子どもの力を活かす援助，ミネルヴァ書房.
- 齋藤和貴・岡安孝弘（2009）最近のレジリエンス研究の動向と課題，明治大学心理社会学研究，4，72-84.
- 下川昭夫（2012）コミュニティ臨床への招待—つながりの中での心理臨床，新曜社.

